

## 21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ⑧

天理教リヨン布教所長  
藤原 理人 Masato Fujiwara

私はフェミニストでもなく、女性の権利拡大を謳う活動家でもないが、天理教のフランス布教において重要なテーマであると思うので、男女平等について書いてみたいと思う。

フランスで天理教の布教に携わっていて、特に女性の口から何度となく耳にするのが「教祖が女性であることは素晴らしい」という言葉である。私自身もその重要性を頭ではわかっているつもりではあるし、おそらく日本人の布教師や信者もそれを強く意識しているはずだ。おそらく、そういう声が多いという国はたくさんあると思う。ただ、私のように女性教祖を持つ天理教を、生まれつき身近に感じつつ信仰生活を送ってきた信者たちには、そのインパクトの強さを測りかねる部分もあるのではないだろうか。

先日、リヨン布教所の講社祭で教祖中山みきの生涯、天理教でいうところの「ひながた」についてざっと紹介した。前回（2014年10月号）でも触れたように、ふだんはおつとめが布教の根幹をなすとの意識から、その実践の重要性について繰り返し説き続けているのだが、その日は少しテーマを変えてみた。すると、その話がよほど気になったのか「なぜそんな話を今までしてくれなかったんだ。そのような話をもっと聞きたい。」と年配のご婦人から指摘された。本当にざらりと紹介しただけなのだが、予想外の反応にこちらが驚いたほどである。

どうやらフランスにおいて女性教祖の意味の大きさが私の想像以上であることが、在仏20年を超えてようやくわかってきたような気がしている。おそらく大半の日本人天理教信者が想像しているよりもっと鮮烈で、計り知れない輝きを、特にフランス人女性には与えているはずである。

フランスでは歴史的にだけではなく現代社会においても、女性は低く見られているという意識が強いように思われる。そのためもあって、男女の平等を説いている宗教の創設者が女性で、なおかつ18世紀末日本の封建体制下に生まれた女性であるという事実だけで耳を傾けるフランス人女性は少なくない。日本の歴史を知らなければ、当然フランスの歴史的背景と重ね合わせてイメージするだろうが、思うにカトリック一辺倒だった20世紀以前のフランスでは、リジューのテレーズ（Thérèse de Lisieux）のように女性がみずみずしい信仰の風を吹かせることはあっても、見聞きしたことのない新たな教えを説き始めるなどは、想像の世界でもあり得ない出来事なのかもしれない。そう考えると女性教祖が教えた男女平等の教義は、フランス布教においては何にも代えがたい大きな武器となりうるのである。

それに加えて、男女平等は中山みき在世時から教義として、また思想としても確立されている。信仰実践の最高儀式であるおつとめは教祖が直々に教えた祭儀だが、男女が同時に同じ場所で一緒に勤めることになっており、また

教えの根幹をなす十全の守護には半分半分で男性要素と女性要素が含まれている。教祖の直筆による「おふでさき」には、「この木いもめまつをまつわゆはんてな いかなる木いも月日をもわく」（7号21）とようぼくになる男女に分け隔てはないと明言されている。また、『稿本天理教教祖伝逸話篇』158番の逸話「月のものはな、花やで」には教祖の言葉として「女は不浄やと、世上で言うけれども、何も、不浄なことありゃせん。男も女も、寸分違わぬ神の子や」とある。これらの事実は、フランス人女性にとって希望の光のように映るようだ。

翻って天理教の男女平等の実際は、教えほど明確に達成されていないと言えるのではないか。さまざまな場面で男性中心主義を感じてしまうことも少なくないだろうし、その傾向は宗教が持ちうる保守性によってより強くなっていると言ってもいいだろう。天理教内の男女平等の達成度は、現代日本の会社や家族、社会通念と比べても低いと言えると思う。

女性の教会長はいる。しかし、男女の教会長が全く同等に扱われているかと言えば疑問符が付く。十分な統計資料は持ち合わせていないが、地方の一宗教法人（教会）のトップは女性であっても、決定権を持つ大きな組織体のメンバーに女性が少ないことを証明するのは難しくないはずだ。

ライシテの歴史でも見てきたように、科学の力が宗教を圧倒し、男性がその進歩に傾倒するようになってきた20世紀に、カトリックを日常生活で実地に支えてきたのは女性の活躍に他ならない。現代の天理教も大半の活動は女性信者が支えていると感じている。しかしながら、信仰生活面の土台として活躍するだけでなく、女性自身ももっと声高らかに教祖中山みきの教えを標榜し、決定権を持つ責任ある立場に進出すべきであろう。慎みや謙虚さは美德であるが、男性と同等の地位を要求することは悪ではない。また男性信者もそれを促すべきである。天理教の定期刊行物や講演会では女性の発言をよく見かけるが、それに加えて組織の芯になる部分にもっと女性の存在があれば、少なくともフランス布教にとって追い風になることは間違いない。

日本という国は、男女平等の先進国と見做されていないと思うが、だからこそ天理教が世間に先んじて、教祖の教えを体現し実践すべきである。あらゆるレベルの会議体、組織体の重役に、信者たちの目にとどく形で女性を加え、あらゆる場面で女性の存在感を高める努力をもっと強く進める必要があると思う。女性を起用すること自体が目的ではないが、責任ある立場に女性の存在が希薄であれば、天理教のフランス布教に有利に働かない可能性が高いだろう。天理教が日本だけのものでよいのであれば問題ないかもしれないが、世界たすけを標榜するのであれば女性の進出は一刻を争う重要課題であると思う。